

悪の軍団と行く、人理修復

古い底の王

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何者かのテロ行為からなんとか生き延びたAチームマスター《ジャック・フロスト》。彼はもう一人の生き残ったマスターとともに、人理修復の旅を開始する。

——胡散臭い悪の軍団つきで。

「なあに、私がいるのだ、その程度簡単だとも。……ところでマスター、腰が痛いので湿布をもらえないかな？」

---

新茶さんいらっしやったのでそのテンションのままに書いていきます。筆者は本編は二部三章までクリア済み、1, 5部は新宿はクリアして今下総国です。

イベントは参加したやつだけ書くかもしれないです。

一部は完結させます。

目次

File. 7	GRAIL	30
Another	File. 1 WAKE UP	27
File. 6	REUNION	22
File. 5	FIRST ORDER COMPLETE	16
File. 4	BATTLE	13
File. 3	SPECIFY	7
File. 2	SARAH AND MEETING	4
File. 1	COLLAPSE	1

# File. 1 COLLAPSE

——熱い。何が起きたのかわからないが、恐らく時計塔に反感をもつ魔術師やどこぞのテロリストの仕業だろう。

有事の際に対応するために常につけておける魔術礼装がなければ即死だった……まあ、現在進行形で死に近づいているわけだがな。

魔術礼装【月霊髓液】。時計塔のロードであり、故人の。ロード・エルメロイ。その魔術礼装を死ぬ気で再現して作り出した逸品だ。二世に尋ねたところ本物には未だ程遠いが、それでもかなり便利な代物である。

流石に爆発を完全に防ぐことはできなかったが。

吹き飛んだコフィンをこじ開けて外に出ると、すでにそこは火の海であった。他のコフィンが動かない様子を見るに、他の奴等は死んだらう。キリシユタリアなんかは自動防御の礼装くらい持つてそうだが……意外だった。

「……『起動。自己診断、修復開始』」

気休め程度に回復の礼装をつけて、その場に座り込む。全身が熱いし痛い、どうやらだんだんと麻痺してきたようでそれらもボンヤリとしている。感覚がないと思ったら、どうやら左手は御陀仏のようだ。

(……あと五分、いや、下手をすると魔力回路の暴走で死ぬかもな。) 人は死にかけると、一周回って冷静になるらしいがどうやら本当だ。この上ないほど頭が冴えているのが自覚できる。

ゆっくり辺りを見渡していると、自分以外に生存者がいるのが見える。あの髪の色は恐らくマシユと、……居眠りをして追い出された一般組の少年だ。

(……あそここの瓦礫の下にいるのは……もう無理か。……やれやれ、魔術師何て向いてないな。)

体を引きずってそちらに行く。二人とも気がついたようでこちらを見つめてくる。最初は助けだと思ったのだろう、少年の顔には笑顔

が見られたが、すぐに消えた。

「……ジャックさん。」

「うん、俺ですね。悪いね、マシユ、少年。今の俺じゃ君たちは助けられんよ。……ここ、ちよつと失礼するよ。ところで、君たち逃げないのかい？」

我ながら意地が悪い。マシユは確実に逃げられないし、彼も恐らくそれがわかったために敢えて逃げないのだろう。愚かな決断だが、悪くない。案の定少年はそんなことを説明する。

苦笑して隣に座り込む。少年がマシユと手を繋いでるのが見えた。

……ふむ、吊り橋効果とか言うやつかな？

「……お邪魔だったかな？最後だし二人の方がいいか？」

そう聞くとこんな状態だというのに顔を赤らめて沈黙する二人に、こらえられず口角が上がる。

隔壁が閉じるアナウンスが聞こえた。これで五体満足な少年も逃げられなくなった。マシユ閉じる何やら話しているが聞かない方がいいだろう。彼女のあるな表情は始めてみた。

(……まあ悪くない最後かね。)

火に巻かれるのが先か、頭上の設備が落下するのが先か。どちらにせよまあ楽に死ねないだろう。火に巻かれるのはより辛いかもしれないが。

そう思い目をつぶる。来るであろう痛みを備えて。……しかしはたして神というのはいららしい。

《アンサモンプログラム、スタート。これより、霊子変換を開始します。》

「…何？」

《レイシフト開始まで、3, 2, 1》

アナウンスの意味を理解し、この後何が起こるが予測はできた。しかしこの二人はよくわかってないらしくもうやられる準備ができて

いるようだ……が、

「二人とも！気を——」

——0

その瞬間、その場の三人は、燃え盛る部屋から消失した。まるで初めから誰もいなかったかのように。

後には、七つの棺とそこに眠るAチームメンバーが残されるのみであった。

File. 2 SARAH AND MEETING

「……………は…？」

アナウンスの内容からして、恐らくあれはレイシフト。つまりここは、我々が来るはずだった特異点ということになるが。

(……………傷がないな、おかしい。俺はもう死ぬはず、なのに無傷でレイシフトしてるとなると……………ああ、死んだか。)

少し考えて納得する。霊体だけのレイシフト。あり得ることだし、状況的に一番当てはまる。……………このままだと帰る前に肉体をどうにかするすべを見つけないと人理修復と同時に消え去ってしまう。それは避けたい事案だ。

(俺がいるならあの少年とマシユもきているはず。であれば探しだして手伝ってもらうか。最低限魔術の知識はあるはずだ。)

彼は知らない。少年——藤丸立夏が魔術師としてはずぶの素人だということ。

(まずは、霊脈を探って英霊召喚、カルデア本部と通信、それとこの特異点の原因の捜索。優先事項はこの3つかな？次点で蘇生と合流……………か。よし、行こう。)

と、脳内の思考をまとめて歩き出す。炎上している町では骸骨兵が襲ってくるが多々あったがそこは月霊髓液でなんとかなった。問題は黒い影だが…幸い未だばれていなそう。1体見たが、あれは恐らくサーヴァントに類する何かだ。この礼装だけでは辛い。

そうして探索すること二時間ほど。遂に目標のひとつを発見する。

「…あ、ジャックさん！…ご無事だったんですね！」

霊脈をたどっていくとマシユ、少年、所長の三人が青い髪の青年と話しているところに出会った。出会ったのだが……………

「……………マシユ、何があったのか知らないがその格好はよくないと思う。」

「え？……あ、ち、違うんです！これは戦闘装束ですね……」

くく情報共有タイムくく

「なるほど。マシユはデミサーヴァントになって、そちらの方は英霊のクーフリーンということか。」

「おう！よろしくな。」

にこやかに笑いかけてくる青い髪青年。ランサーでないのは少し残念だが、それでもケルトの大英雄。かなりの戦力になるだろう。それと、恐らく俺と同じ状態の所長が自分の死を自覚して半狂乱に陥っていたがクーフリーンのお陰でそれも解決。

どうやら今は聖杯戦争の真つ最中。であれば、クーフリーンが勝利したらば逆説的に仮契約をしている少年——藤丸君が勝者となり聖杯を得る。聖杯ならばたいした功績もない二人をよみがえらせるなど容易いだろう。と、説得し、聖杯を得たらすぐさま我々を蘇生、転送し藤丸君達はレイシフトで帰ってくるということだ。

さあ、情報共有を終えたところで、英霊召喚だ。実にワクワクする。マシユの盾を地面におき、拾っておいた高純度魔力結晶〔聖晶石〕を投げ込む。

(……誰が来るか。欲を言えば前衛か直接攻撃ができる3騎士かバースーカーがいいんだが……)

召喚の魔法陣がいつそう強く光り、その中から声が聞こえてくる。

「……こういう時はイケメン騎士や謎の美少女が颯爽と現れて助けてくれるのが物語の常識だが……」

光が収まり、魔法陣を見ると、そこには……

「——残念！現れたのは胡散臭いアラフィフでした！フハハハハ！さあマスター、私のようなものを呼び出すとは君も随分物好きだね。」

よろしい、アーチャー。真名は伏せておこう。なに、私は強いとも。それだけは保証しよう。」

——胡散臭いダンディな老人がたっていた。

誰も何も言わないが、なんとなく意見は一致している気がする。いや、している。己をアーチャーと名乗る老人はにこやかに礼をする。が、何とも芝居がかかっていて胡散臭い。

「…あー、真名は教えられないが、アーチャーでよかったかな?ご老人。」

「そうだね。見ての通り胡散臭いアラフィフだが実力は保証する。…さて、ではマスター。この状況の説明を要求したいのだが?」

これまでのふざけた雰囲気から一気に空気が凜とする。なるほどカリスマ性のようなものがあるらしい。

〜説明タイム〜

すべてを聞いたアーチャーは冷静な面持ちで一つ頷き、懐からパイプを取り出しゆっくりと燻らせる。

「失礼するよ。なに、頭を働かせるにはちょうどいいのさ。…ふう。さて、ではそのキャスター。幾つか訪ねるから答えてくれたまえ。」

「…あん?おう、いいぜ。」

「一つ。今現在生存しているのは何騎か。二つ。元凶と思われるセイバーに何かおかしなところはないのか。三つ。君達はどうして現界していられるのか。」

ただのサーヴァントならばこのまま放置していればアーチャー…この場合は元々参加していた者だね。それ以外は即座に消えるはずだが?」

少なからず聖杯戦争の知識があるオルガマリーとジャックは確かに、と得心する。

しかしキャスターは面倒くさげな表情を浮かべ、否定するように首を横にふる。

「今生きてんのは俺とバーサーカー、それとセイバーの野郎だな。つってもバーサーカーは何でか知らねえが森から動かねえ。あいつはほつといて大丈夫だろ。」

セイバーのおかしなところつつつてもな…悪いが知らねえ。

元々あんな感じかも知れねえし、なんかあったのかも知れねえが、奴の本来の顔なんざ知らねえしな。

最後のは単純だ、セイバーは聖杯のバックアップを受けてるし俺は霊脈を使って魔力を吸い上げてる。やられたやつらも多分聖杯のバックアップを受けてんだろうな。待っても自滅はしねえと思うぜ。」

「……ちよつと待った、それおかしくないか？」

突然割り込んだジャックに視線が集まる。アーチャー以外は頭に疑問符を浮かべているが、アーチャーだけは微かに笑っている。……どうやらあの老人はすでに気がついていているらしい。

(……誰かが気づくの待ってやがったな。)

心のなかでため息をはいておかしな所を口に出す。

「聖杯戦争で使われる聖杯ってことは景品用でしょ？それに本来であれば七騎で争うものなのに、一人だけにバックアップをしているはずがないと思うんだけど。それと、マスターがいらないのに単独顕現できる量の魔力なんて常に供給してたら七騎じゃ足りなくならない？かなりの魔力量だろうけど、万能の願望器とは呼べなくなるはず。……あつてる？」

それを聞いた面々はハツとし、アーチャーは笑みをますます深める。

「素晴らしい！満点の回答だとも。つまりだ。……この件に冬木の聖杯は関係無い。あるいは、関係が薄いと考えるべきだろうね。真の原因は……」

「セイバーに魔力供給してるやつつてか。なるほどな。」

そこで一旦会話が途切れ、各々が思考にふける中、キャスターとアーチャーがそれぞれの武器を構える。

「おいボウズ、わりいが考えてる暇はなさそうだぜ？」  
「その通り。マスター、敵襲のようだ。」

その言葉と共に揺らめくようにして突然現れる黒いサーヴァント。見た目はただの人間だが、その右手は普通とはかけ離れた異形となっている。

「アーチャー、貴方の力をみたい。あれを倒せる？」

それを聞いたアーチャーは愉快だともいうように笑みを浮かべ、いつのまにか取り出した棺のようなものから光弾を打ち込む。

「なによそれ!? 弓どころか銃ですらないじゃない!」

「フハハハハ！ 落ち着きたまえ。これぞ我が宝具だとも。まあ後付けだけどネ?」

(……後付け?)

弾丸を打ち込まれている黒英霊はどうか攻撃しようと隙を探している。が、デミサーヴァントとなったマシユとキャスターの援護のせいで攻撃にうつれず、そのまま危うげなく、黒英霊——キャスター曰く「シャドウアサシン」は倒された。

そのあと現れたシャドウランサーも同様にして倒され、残るはアーチャー、セイバー、バーサーカーの三体となる。

一息ついたところで、先程からなにか考えていたジャックは彼らに提案する為に口を開く。

「すまない、ここから少し別行動にしてくれないか？」

それを聞いて首をかしげる藤丸とマシユ。オルガマリ―所長は理解できたらしく苦虫を噛み潰したような顔を浮かべている。やはりかなり聡明なようだ。

「俺と所長が生き返るためには聖杯を使う必要がある。しかしどうやらセイバーはともかく、バーサーカーは森から動かないらしい。彼を倒さないと藤丸君が正当な勝者とならず、聖杯が使えない可能性がある

る。だからここで俺とアーチャーは森へ、藤丸君達にはセイバーのところへ行つて欲しい。」

「まあ、妥当だろうな。俺ら二人はあのバーサーカーとはちと相性がわりい。だったらアーチャーと魔術師の二人で行った方が良さそうだ。それに、」

そこで言葉を区切り、マシユを見据えるキャスター。

「奴のところにはやセイバーとアーチャーがいる。俺らなら2対2で戦える。嬢ちゃん、気い引き締めろよ？セイバーは強いぜ。」

マシユの顔色が青くなるが、その目はしっかりとキャスターを見ている。その顔を見てキャスターも満足げにうなずく。

少しあるいた先、もうすぐ森にたどり着くところ、不意に足を止める。アーチャーは不思議がりながらも同じく足を止めマスタアの行動を待つ。

「さあ、アーチャー。答え合わせと行こう。」

振り向きながら発した一言に、驚きながらも愉快げに口許を緩ませるアーチャー。

「ほう？いいとも、では聞かせてもらおうじゃないか。私は一体誰だろうね？」

ジャックは一つ頷き、静かに話し始める。

「まず、格好だ。茶色のスーツに外套、ネクタイまでしっかり閉めているところを見るに、貴方は近代以降、恐らくヨーロッパ辺りの出身だと仮定した。外套を着けると言うことは《外が寒い》のか《外では天気が良くない》地域だとも予想できる。」

もしも貴方が仮定した通りヨーロッパ出身ならば、条件に一致するのはイギリスやノルウェーなんかの北欧地域だ。……ここまではどうですか？」

「さあね。続けてどうぞ？」

余裕綽々といった雰囲気パイプをふかす彼はとても楽しそうに、教え子を見る教師のような顔をしている。……やはり【彼】であつていそうだ。

「北欧で近代の英雄というのはほとんどいない。というより0といつていいほど少ない。なぜならあそこは近代は銃や兵器による戦争が主流で、一騎当千の英雄は生まれづらい。……だから戦争に関係する人を外した。」

思考を確かめながら、ゆつくりと順序だてて話す。話しているうちに思考がまとまってくる。己の思考をトレースしながら話を続ける。

「貴方は飄々としているが、かなり理知的で、鋭い発想をしていた。この辺りで俺の候補は【学者】や【作家】等の学術面での功績から英霊になるケースだと予想した。」

……しかしだ、近代の北欧では確かにさまざまな学者がいたが、世界規模で有名なものは少ないし、人理に刻まれるほどの大発見も少ない。それこそ、「ニコラ・テスラ」とか、「トーマス・エジソン」だとか、そういった発明家達には及ばない。」

けれど、と続ける。いつのまにやらアーチャーは棺を消し、杖を両手で突き、清聴の構えをとっている。ここまでの推理は彼のお眼鏡にかなったようだ。

「英霊には、伝承が広まりすぎたせいで後付けされる概念がある。例えば、ルーマニアの聖杯戦争で呼び出されたヴラド三世は【吸血鬼の伝承】という事実無根のスキルが備わっていた。」

であれば、同じことが英霊にも起きるのではないか？

伝承が広まったことで、存在しなかった英霊が「あたかも存在していたかのように英霊となる。」……ここまで予想すれば早かった。

【近代の北欧で世界中の人間が知るほどの伝承をもつ学者、作家】。そしてこれが実在しなくてもいいのならば、一人だけ、心当たりがある。

作中で【スコットランドヤード】を煙に巻き、最高の名探偵すらも

有罪証明を諦め、遂には相討ちという手段しかなかった19世紀の大犯罪者。悪のカリスマとされ、《犯罪界のナポレオン》とまで称された大学教授。」

彼の――【教授】の顔が明らかな愉悦に染まる。よくぞ見抜いた、と称賛すらしていそうな表情。

「――Professor. ジェイムズ・モリアーティ。それが貴方の真名だ。」

俺の推理を最後まで聞いたアーチャーはなにも言わずにその笑みを少々——いや、かなり悪どいものにする。

「……ククツ、お見事、といっておこうかマスター。さて、ではどうするのかね？ わざわざこんなところで推理を披露したのだ。なにか言いたいことがあるのだろうか？」

いつもの胡散臭い話し方をやめた彼は威厳やカリスマといったものをにじみ出している。なるほど、流石ナポレオンと表されるほどのカリスマ性である。思わず膝を屈しそうになるがなんとか耐える。

「……あなたはマスターだからと言って忠誠を誓うようなタイプじゃない。霊呪で縛るにしてもきつと抜け穴を探さだろう。だから交渉がしたい、貴方は裏切らない。代わりに自分が手足となって動くし、貴方の望みをかなえる最大限の努力をしよう。」

それを聞いたアーチャーは先程までの威圧をすべて消し去り、快活な笑みを浮かべて話し始める。

「……いいだろう！ 君をマスターと認めようじゃないか。だから君もその妙な話し方をやめて素をだしたまえ。彼らは騙せても私は騙せんぞ？」

そう言われてフツと肩の力を抜き、今までの魔術師然とした態度を止め、何とも情けない笑みを浮かべる。

「……まあ気づきますよね……。精一杯虚勢張ってたんですけど。」  
「まあ確かにそうだね。ただ今の方がとっつきやすいから彼らにはその態度でいいんじゃないかな？」

「ですよー、じゃ帰ったらこの感じでいますね。……あの、教授。もし俺がカルデアで呼んだら来てくれますか？」

その問いに、まさに好爺爺といった笑顔で「もっちろんさー」と、答えるこのお茶目な老人をだれがかの勇名なモリアーティ教授だと気づくだろうか。いや、気づくまい。

「有難うございます。じゃ今後のことなんですけど、バーサーカー討伐の作戦を言うので、粗があったら教えてください。」

「いいよー。」

「……調子狂うな、ンン」ツ、まず教授の宝具ってなんですか？攻撃できます？」

うむ、と言いながら棺を取り出す。……結局あれはなんなのか。

その疑問を読み取ったのか説明をしてくれる教授。

「これが私の宝具サ。名を【終局的犯罪】《The Dynamics of an Asteroid》。真名解放をすれば【小惑星を相手の頭上に落とす】ことができるね……まあこれ私のじゃないけどネ！」

「とうとう?。」

「ちよつと別世界で色々あつてネ。詳しくはナイシヨ。まあ色々あつて魔弾を使えるお茶目な老人ダヨ。」

(……あれ?一つも説明されてない気がする……。まあいいや。)

「じゃ、こうしよう——」

くく作戦会議(悪巧み) タイムくく

作戦を決めた彼等は森の前に来ていた。確かに強力な反応がある。

「よし、じゃあ手はず通り。」「まかせたまえ。」

そう言つて彼は——令呪を切つた。

「令呪をもって命ずる。アーチャー【全力で宝具ぶっぱなせ。】重ねて命ずる。【確実に対象に当てる。】さらに重ねて命ずる。【宝具の威力をあげろ】」

「了解だともマスター! さあ、名も知らぬバーサーカーよ死ぬがいい! 《終局的犯罪》!」

——その瞬間、森に隕石が落ちた。その余波はすぐそばにいた彼らのもとへも届き、強烈な衝撃波は彼等を吹き飛ばす。

……そして衝撃が収まった頃、森は消えていた。

「ドクターロマン。バーサーカーの反応はあるか?」

『おおー！突然だね君達！……いや、消失しているね。倒したのかい？』

「ああ、なんとかね。藤丸君達にすぐに合流すると伝えてくれ。」

『了解だとも！お疲れさま、気をつけて！』

プツン、と通信が途絶える。それを確認して教授と目を合わせ――

「イエーイ！」

ハイタッチをする。正々堂々もなにもない。いつそ清々しいほどの奇襲である。【魔弾は必中する】という性質と【巨大隕石】の質量によつてあつけなく潰されたバーサーカー。本来であれば対応できそうなものの。狂化されており、それも意識外からの自然現象には流石に勝てなかつたようだ。

「さすが教授！完璧な計算ですね！」

「そうだろうそうだろう！もつと誉めてくれたまえ！ハツハツハ！」

「ハツハツハツハツハ！」

クズである。控えめに言つてクズである。罪悪感の欠片も見せず  
に笑いあう悪魔の師弟は、この後ご機嫌なままに急いで洞窟へと向かうのであつた。

File. 5 FIRST ORDER COMP  
LETTE

くく藤丸視点くく

ジャックさんと別れてからたどり着いた洞窟だけど、かなり厳しい戦いが続いている。クーフリーンはアーチャー（アラフィフじゃない方）と戦うから離脱したし、マシユは黒いアーサー王の攻撃を防ぐことまでかできていない。

（このままじゃ……！息切れして押し負ける！）

もう令呪は一画使ってしまった。まずい、何か、なにか逆転の一手を見つけないと……！

ふと、となりにいたはずの所長が見当たらないことに気付く。一体どこへ——

「【ガンド】！」

声が聞こえ、一瞬だけアーサー王の動きが止まる。もちろんそれを見逃すはずはなく、渾身のマシユの盾が鳩尾に入る。

「グツ…貴様……！」

所長は今にも泣きそうな顔で指を突きだしたまま震えている。その所長に向けて、アーサー王が剣を振りかぶり——

「流石所長、完璧なタイミングです！」

——後ろから打ち込まれた光弾で吹き飛ばされる。

「すまん、待たせた！今加勢する。」

「わりいなボウズ！だがよくやったぜ！焼き尽くせ！【灼き尽くす炎の檻】《ウィツカーマン》！」

燃える巨人が現れ、アーサー王を押し潰す。初めは耐えていたが、光弾に足を掬われ、バランスを崩しそのまま崩れていった。

……勝った、のだろう。一気に力が抜け、その場にへたりこむ。どうやら、マシユも同じらしく似たような体制で呆然としている。

(……はあつ、良かった！勝った！)

心のなかでガッツポーズを決めてよろよろと立ち上がる。アーサー王を見ると、未だ消滅してはいないが、足元か消えている。限界だろう。

「……終わり、のようだな。まあ攻めきれなかった私の落ち度だろう。仕方ない。……まったく、いつかは勝ちたいものだ。」

「さて、何処の者かは知らないが、そのシールダーのマスター、それにアイルランドの光の御子よ。油断するな、《グランドオーダー》は始まったばかりだ。」

そう言い残し完全に消滅するアーサー王。心なしかその表情は満足げに見えた。

「あ？どういいう……ああ、くそ、時間だ。じゃあなボウズ、次呼ぶならランサーでよろしくな！」

クーパーリンも帰っていった。最後まで気持ちのいい人だったなあ……また会えるといいな。

「……あー、すまない、フラフラな所悪いんだが、俺たちを生き返らせてほしい。」

『お疲れ様！急いだ方がいいよ！その特異点はもう崩壊s……—』。

「……なに？」

通信が切れた直後、大聖杯の影から何者かのシルエットが見える。彼はゆっくりとこちらに近づき、……遂にその顔が露になる。

「レフ！」

喜色満面の所長が近づこうとする——が、ジャックさんが手で制する。

「ちよつと！何するのよ！」

「落ち着いてください。彼は怪しすぎる。……ミスターレフ。貴方はここで何をしているのです?」

ジャックさんとアーチャーが警戒している。それを見た私達も体をどうにか起こして戦闘体制をとる。

「……え? な、なに言い出すのよ。大丈夫よ、レフは味方よ。……そうでしょ?」

すぐるような所長の声を聞いてにんまりと笑うレフ教授。……嫌な予感がする。元凶って、もしかして……?

「——はあ、まさか君たちがいるとはね。ジャック・フロスト、オルガマリー。君たちを生かしておく気は更々なかつたんだがね。」

それを聞いた所長の顔が真っ青を通り越して蒼白になる。今にも泣き出しそうな震える声で「嘘……嘘よ……」と繰り返す姿は、見ていて痛々しい。

『——よし、繋がった!……え、レフ教授?』

「ドクター、こいつは敵だ。恐らく今回の元凶だ。」

なんだって!と、驚きを露にするドクターを尻目に、レフとジャックさんは油断なく見つめあっている。

(すまない、立夏君、マスターが警戒している今のうちに、聖杯に願いを。)

ビツクリしたけど声は出さずにすんだ。起こす振りをして小声で囁いたアーチャーの言葉に小さく頷き、声をあげる。

「本当に君達は……聖杯よ! ジャック・フロストとオルガマリー・アニムスフィアを生き返らせてほしい!」……貴様!?!」

その瞬間、所長とジャックさんのからだが光に包まれる。

「ハッ、ざまあないネ、黒幕ムーブがしたいなら退路をたつことだお間抜けさん!」

そう捨て台詞をのこすアーチャーを横目に見つつ、こっそりと発動していた帰還プログラムによって姿を消す私達。

それを見ていたレフの表情は、この上ないほど邪悪で憎悪に染まっていた。

くくジャック視点くく

帰って来た。全身問題なく動けるし、月霊髓液も使える、流石は聖杯、どうやら完璧に肉体を構築してくれたらしい。

「良かった、みんな無事そうだね、ジャック君と所長は後でバイタルチェックを受けてくれないかな？」

相変わらず頼りなさげなドクターに迎えられてカルデアに戻る。掃除だけは終わったらしく、爆発の痕跡はだいぶ無くなっているが、視界の端に冷凍保存されているコフィンが見える。

（皆……いや、待ってる、すぐに直す。時計塔ならなんとかできるはずだ。）

バイタルチェック等を済ませてドクターの所に行き、とりあえず今すぐ全員を時計塔に送るから手続きを頼むと告げると……

「ごめんね、無理なんだ。今理由については皆を集めて説明するから、ちよつと来てほしい。」

……猛烈に嫌な予感がしたが、仕方がない。会議室へと向かう。

その後、外部が滅亡している——いや、焼却されている事実を確認し、七つの特異点の話が聞かされた。荒唐無稽としか言いようがないが、すべて現実だからたちが悪い。

「それでだ、二人とも、マスターとして手伝ってくれないだろうか。危険な任務だ。命を落とすかもしれない。だけど、やらなきゃいけないんだ、頼む……！」

……藤丸を見ると、強い光を称えた眼差しで見つめ返し、頷いた。

(…だろろうなどは思ったが、底抜けのお人好しってのはこういうやつかね。)

「やります!」

「やろう。もとよりそのために呼ばれてきた。任せてくれ。」

「……ありがとう、じゃあ、英霊召喚の儀式をしよう。所長とジャック君が集めていた聖晶石が合計30個、それと……」

「はーい!ダヴィンチちゃんお手製のお手軽魔力供給媒体、名付けて呼符だよ!いやー、私のセンスが怖いね!」

「……と、言うことで呼符が四枚。これを二人で分けてくれ。」

満面の笑みを浮かべるダヴィンチちゃん、苦笑しているドクターロマン、苦虫を噛み潰した表情を浮かべている所長。見事に三者三様だが、所長はどうしたのだろうか。

……あ、もしかしてレイシフト適正がないことを気にしているのか? 大した問題ではないと思うが、こればかりは当人の問題だしな……。

そんなことを考えていると藤丸君が笑顔で所長に声をかける。

「所長、サポートありがとうございます!おかげで、アーサー王に勝てました!やっぱり本職の魔術師ってすごいんですね!」

「……はあ? 大したことないわよ。いいから召喚しにいきなさいな。」

……(どういたしまして。)

……ふむ。

「……君はすごいな……。」

「?」

本気でわからないといった表情の藤丸君に暖かい眼差しを向けるドクターとダヴィンチちゃん。天然のひとたらしとはこういう奴のことを言うんだろうな。

……さて、

「一ついいかな?」

「どうしたんだい? なにか聞きたいことでも?」

「いや、大したことではないが……長い付き合いになるだろうからね、そろそろ猫を被るのを止めようかと。」

そう言つて肩の力を抜き、作つていた表情を止める。すると、そこにいたのは先程までの厳格な魔術師の青年ではなく――ドクターロマンに似た雰囲気を感じるどこか緩い普通の青年だった。

「改めまして、ジャック・フロスト。錬金術師やつてます。得意なことは兵器改造とか料理だよ。よろしくね立夏君。」

そういつて柔らかく笑う彼に、驚いたような顔をする面々だが、即座に立ち直った立夏がジャックに手を差し出す。

「うん！よろしくねジャックさん！」

そうして、人類の危機とは思えない穏やかな空気の中、人履修復は始まったのであった。

File. 6 REUNION

「よしーそれじゃあ召喚と行こうか。二人とも、こっちだよ。」

「ドロマン——本人の許可を得てロマンと呼ぶことになった。——の指示に従い移動する。途中で立夏が話しかけてきた。」

「ジャックさん、何であんな冷たそうな感じだったの？」

「魔術師ってプライド高い人が多いんだよ。あんまり誉められると怪我させられるから仕方なくつてもころかな。……まあ人見知りもあるんだけどね。」

その返事に納得したのかクスツと笑って前を向く。ちなみに今の彼の姿は——まごうことなき女性だ、それも結構美人な。

なぜかというのだ。

『ところで立夏君、君は魔術使えないの？』

『いやあ、使えないんですよ。妙な体質でして……ほいっと。』

『うおっ！立夏君が女性に！』

『こんな感じで魔力を使って性別変えたりなんとなく相手の感情がわかるんですよ。それでここに呼ばれたんですよ。』

『……ちなみにどっちが本当の性別？』

『気分ですかね！ちなみにバイだよ！』

『うんその情報は聞きたくなかった。』

……まさに人体の神秘。ダヴィンチちゃんもそうだがどうしてまともに性別が固定されていないのか。不思議すぎる。

女性バージンは赤髪に童顔の可愛い女性だが、スタイル抜群で外を歩けば確実に目を引くであろう美少女である。男バージョンもかなりかつこいいしきつとこいつはモテるに違いない。

「さ、ついたよ、それじゃあ、どうするんだい？」

「私から行きますー！」

来る途中に決めたんだが、立夏君……ちゃん？あー、立夏が聖晶石、俺が呼符ってことに決まった。

理由としては立夏の方がくじ運良さそうだし、相性召喚なら彼女の方がより英雄らしい英雄が引けそうだからだ。

……俺は最初っからモリアーティ教授来るような感じだしな。

そんなことを考えているうちに始まったガチャ……英霊召喚だが

……

「……………布？」

白い……………トーガ？だったかな、そんな感じの布が出てきた。恐らく礼装だろうが……………なんだろうなこれ。

『おっと！礼装だね！解析するよ……………うん！OK。それは「マグダラの聖骸布」だね。着れば持ち主の力で男により深く攻撃が入るよ！』

……呪われてる気がするが大丈夫だろうか。いや、聖骸布となのっている以上、これは聖遺物なんだろう。うん。

次に出たのは……

「おう！よっしや、ちゃんとランサーで呼んだな！クーフリーンだ！よろしく！」

「アニキ！」

「おう？……………ボウズはどうした？」

「その女の子。」

「はあ？……………マジっばいな、どうなってんだ？」

「まあまあそれはともかく、よろしく！」

「おう！任せろ！」

クーフリーンだ。うっ……………自害……………麻婆……………ブーメラランサー……………なんだ？

俺が変な電波を受信しているうちに召喚は続いていく。

「サーヴァント、アサシン。佐々木小次郎の名を借りて参上した。なに、しがない農民だとも、よろしく頼む。」

「巖流島！燕返しみたい！」

「ハハハ、どうやら愉快なマスターに呼ばれたようだ。よかろう、では終わってから一戦如何かな？ランサー殿。」

「いいぜ、おまえとは一度真剣勝負してみたかったんだ。叩き潰してやるぜ！」

「ほう、血気盛んなことすな、実に楽しみだ。……うん？マスター、どなたか参られたようだぞ？」

光輝く召喚陣に小次郎が気づき、そちらに眼を向ける。すると、今までとは一線をかく光と共に、現れたのは……

「応！ライダー、アキレウス参上ってな！よろしくな！マスター！」

「おおお！凄い！アキレウス！本物だー！」

「ハハ！元気な嬢ちゃんだな！よっしゃ、任せろ！」

クーフリーン、佐々木小次郎、アキレウス、と、中々にそうそうたる面子を呼んだらしい。挨拶もそこそこに、次は俺の番になる。

……まあ、始めに来る人は決まってるんだけどな。石と同時に、教授にもらった一冊の本を投げ込むと、その瞬間本が消え去り、光が強くなる。

召喚陣が輝き、アキレウスに勝るとも劣らない輝きを放つ。

「さあ、マスター。久しぶりだね、私だ。さて、真名は伏せておこうか。また呼ばれるとは……マスターも物好きだね。」

「あえて嬉しいよアーチャー。長い付き合いになりそうだし、これからもよろしく頼むよ。」

「フハハ！まかせたまえ。君の安全は守ってあげよう！私がいればすべて問題なく片付くとも！」

「……んだ？あのじいさん。胡散臭えったりやありやしねえ。」

「そうですね。しかし拙者は何やらシンパシーを感じる次第。仲良く

なれそうでごさる。」

「小次郎さんも大概胡散臭いもんね!」

「マスターが辛辣でごさる。」

うん、向こうも仲良くなってるようで何より。あいつのコミユ力すごすぎだろ。

さて、あと三枚か。サクサクつと行きますかね。

一枚目………鍵?こりや代行者のやつか。持っておけば有事の際に役立ちそう。

二枚目………お弁当………これ食べて大丈夫かね?

三枚目………おっと?これは英霊の反応かな?

光が収まると、そこにはフードを目深にかぶり、紫のローブに身を包んだ女性がたっていた。

「貴方がマスター?そう、よろしくね。キャスター、メディアよ。せいぜい、裏切られないように、ね?」

妖艶な微笑みを浮かべているのがわかる。……なんだかな。俺の本性ってどうなってるれば来るのがこんな感じの二人なんだ?まあいい、神代の魔術師なら色々と教えてもらおう。きつともう少しはましになるはず。

「よろしく、メディアさん。俺かジャックで、こつちが……」

「藤丸立夏です!よろしく!」

「あら、元気がいいのね。フフ、いいわ、好きよ?そういう子。……げっ、アキレウスじゃない。」

「失礼だな。旦那だろ?」

「元、よ。まあいいわ、前衛は頑張ってるね?後ろから援護はしてあげるわ。」

「俺ごと巻き込んでか?」 「あら、よくわかってるじゃない。」

……幸先悪いがまあ、いいや。うん、よし、じゃあ、一旦部屋で挨拶でもしようか。

「うん、召喚は終わったね。じゃあ二人とも、特異点が発見されるまでは部屋でゆっくり休んでて。」

「はいー」「了解です。」

---

部屋に戻るとメディアさんはとつとつとフードを脱いでベッドを占領する。……俺の布団なのに。

「メディアさん、自己紹介しましょうか。」

「いいわよ。そちらのおじさまからどうぞ?」

「おや、私かね。では、アーチャー、ジェームズ・モリアーティだ。真名は他の面々には隠しているから呼ぶときはアーチャーと呼んでくれたまえ。」

「じゃ、俺かな。マスターのジャック・フロストです。錬金術師やつてますんで、暇なときでいいので魔術を教えてくださいませんか?」

「ええ、いいわよ。じゃあ私の番ね。メディアよ。出身はギリシャ。大抵のことはできるわ、よろしくね?」

そんな感じで和気藹々と過ごす日々は中々に有意義なものだった。錬金術で作れるものも増えだし、新しい課題も見つかったし、なかなか順調だ。

——そして二日後、特異点が発見された、と連絡が入った。

——んあ？

(……あつたま痛い……ここどこだし……。)

確か昨日は飲み会でしこたま飲んで……家で着替えて寝て……うん。よし、ちゃんと帰ってるはずだ。

(……ここ完全に駅前だよなあ。)

うん、夢を見たのかあのあと結局出ていったのかはわからないがわざわざ新宿駅まで戻ってきてしまったらしい。何て無駄なことをしているんだ。

(……今日会社休みで良かったマジで。とつととかえってちゃんと休もう。)

辺りを見渡すと、未だ朝方なのか辺りはかなり暗い。っていうかまだ夜だ。ということは本気で夢だったのかもしれない。

——と、そこまで考えて自分がなぜかライダースーツのようなものを着ていることに気付き、顔を青ざめさせる。

(飲酒運転?!やば、免停はキツイ!バ、バイク何処に置いたんだ?)

周辺に愛用のバイクは見られない。ここにはないのか、あるいは家でなぜかライダースーツに着替えたのか……と、そこで違和感に気付く。

(……この服俺のじゃねえな。……ってかここ新宿駅じゃなくね?)

ライダースーツではなく、少々古い時代の服であり、昔彼が専攻していた世界史で見たことがある。なんの格好だったのかは思い出せないが、どこぞの傭兵か戦士か。そんな感じの何かだったと記憶している。

そして、もう一つ。

看板はいつもの新宿駅であるが、よく見ると所々に違和感がある。それに……広すぎる。たしかに新宿駅は迷宮のような作りをしているが、本当に迷宮ではない。少なくとも、ビルを横に倒したような巨大さではなかったはずだ。

不審に思った【彼】が辺りを散策すると――

(……いや嘘だろ……)

――巨大な狼が眠っている。いや、狼なのだろうか？少なくとも、近所の犬とか、動物園の犬科コーナーとかでは見たことがない。軽く見積もっても3Mはありそうだ。

(………あり？見覚えあるなこの狼。TVとかだったっけ？………んー。)

起こさないように慎重に観察する。ふかふかの毛並みは所々逆立っており、銀色の体毛はまさに王者の風格。

(………あーそうだ新宿のライダー！)

………そう、似ているのだ。彼が数年前からはまりしているスマホゲーム、【Fate／Grand Order】。彼はまだクリアしていないが、その1、5部に登場する新宿のライダーにそっくりなのである。

(うわー、すげえ本物みたい。あ、イベントとかでなんかするのかな？いやでも流石のきのこさんもそこまで新宿に命かけてないだろうしな。ってかんなことするなら石配ってほしい。………んんん？)

と、己の思考の違和感に気付く。巨大な狼、新宿駅、ライダースーツのようなものを着ている男。

(待って待って。そんな馬鹿な。たしかに俺は夢に生きてる男だけど転生とかにはおかしすぎるだろ。)

と、そこまで考えていたとき、目の前の存在が覚醒する。

「ガールルル……」

(…………マジかよ。)

眼は赤々と燃えるように輝き、その口からは唸り声と共に人間ごとき一噛みで殺せるような強靱な牙がならぶ。

——ウオオオーン！

闘争心に満ちた遠吠えを聞いた男は、その声に恐怖で身をすくませながら、己の境遇を悟る。

(…………俺、新宿のライダーの上の方になったの?)

これは、様々な要因により正史と異なる未来へと進むであろう、亜種特異点、【新宿】の物語である。

## File. 7 GRAIL

「さあ、皆集まったみたいだね。じゃあ次の特異点の話をしていくよ。」

あれから二日、意外と早く見つかった。藤丸はどうも緊張しているのか、顔が青っぽい。マッシュもにたような顔をしている辺り、この主従はかなり相性がいいようだ。

「次の特異点は14世紀のフランス。百年戦争の休戦期だね。」

「うん、フランスは自由とか人権とかの先駆けだからね。あの国が戦争を続けたら民主主義とかそういうのはかなり遅れるだろうさ。」

なるほど。つまり何者かがフランスを攻撃、或いは戦争の継続を行っている可能性が高い…かな？

「それじゃ、出発だ。よろしくね、三人とも。」

「了解です。」「はい!」「了解。」

---

「——お！来たねえ、よく来たねえ、お疲れ!」

……いや誰だし。レイシフトが完了したのかと思ったら、藤丸どころか教授も師匠もいないし。

なんとも歪んでいるというか、暗いというか……混ざっている? ような空間。少なくとも、フランスではなさそうだ。

目の前にいるのは小柄な……小柄な……青年かな? 黒い影みたいなものがまとわりついていて判別不可能だ。

彼? はこっちの困惑もお構いなしに危機として話し出す。

「いやあ悪いね、突然呼んじゃまって。ただまあなんつうの? ちよつとさあ、たのみごとがあるんだけどさ。聞いてくれない?」

そう言いながらニヤリと笑う影に嫌な予感が隠せない。この表情は教授と似たものを感じる、あくどい笑みだ。

「……まあできることなら聞くだけ聞いてみるけど、なんですか？」

「よっし！その返事が聞きたかった……ほらよ！」

そういつて渡されたのは——聖杯!?

慌てて解析魔術を使うと、どうもおかしい。汚いというか危ないというか……呪われている。

「おたくらなんか面倒なことには首突っ込んでんじゃん？それ持っつてくれりやさあ、多分俺、最弱英霊から抜け出せんだよ！つーことで、それ。しばらく持っつててくれや。なに、そこそこたまつたらこつちから回収ついでにいくからさあ、そしたら手伝ってやるよ！」

じゃあな！と手を降り、消えていく影。そして、ハツと目が覚めるかのように景色が切り替わる。

『着いたねー！じゃあ、近くに反応があるから行くといいよ。多分だけど町か何かがあるはずだよ。』

「うんー！じゃあジャックさん、行こうー！」

「……え？あ、おう。行こう。」

……夢？じゃないよな。……右手にもっているのは確実にさっきの聖杯だし。

聖杯を鞆にしまいこんで、とりあえずさっきの件についての思考を止める。今はどうにも判断ができない。嫌な気配ではあったが、悪いやつではなさそうだったし、助けてくれるんならもらっておいて損はない……はず。

「……貴方。それ、気を付けなさいね。」

「師匠？これが何かわかるんですか？」

「良くないものよ。……ええ。でも役にはたつでしょうね。あれを呼

ぶのにそれ以上の触媒はないでしょうし。」

嫌そうな顔で鞆を睨み付けて、吐き捨てるようにそう言ってもう、その話題は止めだと言わんばかりに切り上げられた。触媒……ということは、あれはやはりサーヴァントなのだろうか。

「……マシユ……話して……」

「……了解です……峰で。」

よし、考え事はやめておいてあの二人を止めにいこう。なんか物騒なこと考えてる。

「あー、ムツシユ？我々旅の者なんです……」

今こそ教授直伝の他人の懐に潜り込む理知的会話術を披露するときだ！

「まあこうなるよネー！ところでマスター？私の武器に峰とかないんだけど？」

……よし、パターンBだ。あそこで傍観してる師匠に任せよう。

しかし考えが読まれているのか師匠が目を会わせてくれない。右をみたら左に、左をみたら上に、上をみたら下に目を剃らされる。……よし、必殺技だ。

「……（捨てられた子犬の目）」

「……ぐぬぬ。」

「藤丸、マシユも。ちょっと。……ヒソヒソ。」

「なるほど、了解です。」「OK！」

「……（上目使いで胸のまえで手を組み、目をうるうる）」

「ああもう！解ったわよ！止めなさいよその目は

【hUPNoS】！」

呪文を唱えた瞬間バタバタと崩れ落ちるフランス兵達。外傷は一

切なく、ただ眠っているだけである。詠唱ほとんどしてないのにこの効果とは、やはり神代の魔術はすごい。

「じゃ、藤丸、先導任せた。」

「え、私？……しゅっぱつしんこー！」

「おー！」「お、おー？」「……はあ。」「ハッ！元気でいいねえ嬢ちゃん。」

因みに小次郎は周囲の探索、クーフリーンは倒れた兵士の護衛をしている。なんだろうこのパシリ感。涙が出るぜ。

「戻ったぞマスター。」

「あ、小次郎！どうだった？」

「うむ、確かに町……というより砦があつた。恐らくはその兵の本拠地であろうな。そうさな……歩いて一時間と行ったところだな。」

「OK、行こう！」

と、いうことで、まずは近くの砦へ向かうことになった。……大丈夫かね？このチーム。